

令和5年度 学校評価 自己評価まとめ

学校評価委員会

評価対象		評価項目	評価の観点	評価	昨年 評価	成果	課題
1	学 習 指 導	・自ら学ぶ姿勢 ・授業改善 ・基礎学力の定着	・それぞれの授業において「言語活動」を意識し、対話的な学習活動に取り組んでいくことで生徒が主体的に考え学ぶ姿勢を育てていく。 ・授業評価アンケートを実施して授業改善に活かす。	2.83	2.94	教員それぞれが授業アンケート等を参考に授業改善に取り組んでいる。「基学」や各種外部模試・検定試験を実施して、生徒が社会人として求められる基礎学力を身につけられるよう努めた。また、日々課題、週末課題、外部模試や検定試験等を通して目的意識を持って継続的計画的に学習する姿勢を育むことができた。	生徒の学力をより一層向上させるためには、同一授業担当者同士はもとより、職員全体の緊密な連携と指導に関する共通理解が必要であろう。自ら学ぶ意欲を持たせるために、生徒個々の変容と成長を重視する学習指導及び評価を実践し、生徒が成就感を持てる学習機会を増やしていきたい。ICT機器の有効活用がこれからの課題であると思われる。「紙と鉛筆」も大切であることを認識しながらICTにより何をすべきかを実行していくことが急務である。
			「基学」、基礎力診断テスト、各種検定の受検、読書週間など多様な取り組みにより、生徒が自ら基礎学力の伸長と教養の涵養（自分をカルチベイトすること）を意識するよう図る。	2.66	2.88		
2	生 徒 指 導	・規範意識 ・人権教育 ・自他の尊重	規範意識（ルールを守ろうとする気持ち）の向上を働きかける機会を定期的に設けるとともに、お互いを尊重する人権感覚を育てる教育活動を行う。	2.57	3.13	規範意識、社会における相互尊重という観点で子供の甘えを捨てきれず、大人として必要とされる節度を持ってない事による指導事例がほとんどである。刑法犯の発生は0で、警察等が関わる大きな指導事例はない。以上より、制服指導、挨拶指導をはじめとした日常生活における小さな規範意識の指導は一定の効果を出していると思われる。 ・人権教育学習会を、本校の生徒職員だけでなく、稲荷山養護学校高等部更級分教室の生徒職員と共に、実施することができた。	左記にかかわらず、「幼さ」を捨てきれない状況は今後、大きな問題行動に発展していく危険性をはらんでいる。感染症の影響で、登校停止等があり、ルーチンとしての規則正しい学校生活と毎日のHRにおける生徒指導が十分できていない可能性も否定できない。本年度も感染症による欠席者対応として学年集会を2度実施する等の対応を行ったが、来年度以降も現状のような状況が続くようであれば、前述のような対応を一般化する等、何らかの措置は検討するべきである。 ・他者に対する言動が思いやりに欠けたり、自己中心的な生徒たちが一部目立った。意図的な感情表現やコントロールができる能力を身に付ける「SST」の実施が必要と考えられる。
			生徒が円滑な人間関係を築くことができる力を身につけるため、教員・生徒相互に挨拶や礼儀を重んじるとともに、連絡相談など日常的に細やかなコミュニケーションができるような雰囲気醸成していく。	2.43	3.19		
3	キ ャ リ ア 教 育	・進路指導 ・自己指導能力の育成	就業体験や講演会、適性検査などを通してキャリア教育への取り組みを進め、生徒が自らの未来について考え、将来、社会の中で主体的に生きていくことができるよう図る。	2.86	3.16	学年会や外部講師による進路ガイダンス、進路係による個人面談や企業の学校内ガイダンスを積極的に実施することで進路について考える機会を複数回持った。早い時期から進路意識を高める取り組みを行うことで、進路選択と決定に良い影響が出ており、今後も継続して進めていきたい。	主体的に自分の人生を切り開いていけるように、早期から自己理解、自己分析をさせ、進路を意識した学習習慣を身につけさせる必要がある。また農業高校での学びを文字化して表現できる力が必要である。進学希望者に対しての取組も課題である。今後の社会状況の変化にも対応できるキャリア教育をさらに追及していきたい。
			卒業時の進路決定を見据えた取り組みを1年次より段階的に行い、意識を高めるとともに、進学・就職に必要な学力の育成に努める。	2.86	3.09		
4	社 会 に 開 か れ た 教 育 活 動	・地域連携 ・地域資源の教材化 ・自主活動（生徒会・クラブ）	「信州学」など地域の資源に着目した教育活動や各種交流活動に取り組み、地域とのつながりを意識し、将来、地域のために貢献できる人材の育成に努める。	3.29	3.00	「信州学」の活用では、フラワーアレンジメントの技術指導をお願いし、参加生徒の技術の向上が見られた。 今年度は外部でのイベントや販売会が開催され、意欲的に参加する姿が見られた。このような取り組みを通して社会性などを向上させることができた。 一部の生徒は積極的に活動しているが、年度途中で退部やクラブ未加入者も多い。	「信州学」は引き続き活用していきたいが、校内でより周知することで活発な利用を検討していきたい。 様々なイベントに参加することで、生徒の成長につながるが、教員の負担軽減も考えていかなくてはならない。一部の職員だけでなく、立場を超えて興味を持つことが必要。 魅力あるクラブ運営と指導。積極的に参加した生徒が、離脱しないようにする。
			生徒会・農業クラブおよび課外クラブ活動への生徒の自発的な参加と主体的な活動に取り組むように促す。	3.00	3.03		

「評価」欄はABCDで記入して下さい。「A」=4点(たいへん良い)、「B」=3点(おおむね良い)、「C」=2点(やや悪い)、「D」=1点(たいへん悪い)。

評価対象		評価項目	評価の観点	成果と課題
5	農 業 教 育	1年 (基礎教育)	農業科の基礎科目の学習を通して、2年進級次のコース選択において自ら積極的な選択ができるよう指導する。	感染症の影響は大きく、実習、基礎力向上の面で十分な指導が実施できたとは言い難い。しかしながら、各クラスとも農業研究レポートに精力的に取り組み、各クラス代表による研究発表会を実施できた。課題研究発表会においても1年1組が学年代表として3年と遜色ない発表ができたが、クラスにより発表内容のレベルに差がありすぎる。指導者（教員）のレベル向上が求められる。
		A 生産技術	作物生産技術を中心に、機械、土木系資格取得、技能習得に積極的に取り組み、関連する地域産業に貢献する人材育成を目指す。	作物生産技術を中心に、機械、土木系資格取得、技能習得に積極的に取り組み、関連する地域産業に貢献する人材育成を目指すことができた。また、今年度も姨捨の棚田の整備活動にも参加し、地域との交流も図れた。進路については就職者が多かったが進学者も増えてきたこともあり、作物、機械の知識をさらに身につけ、姨捨の棚田などの活動に積極的に参加する人材を育成していきたい。
		B 流通経済	簿記能力検定において商業科卒業生徒と同等以上の技能を習得し、事務・販売・流通系で活躍が可能であり、かつ水稻を題材とした研究を深めて4年制大学、短大、大学校への進学もできる人材の育成を目指す。	2年は、今年度中に全経簿記検定2級は全員取得可能な見込みである。さらに高い資格取得を望む生徒が多かったため、3年時に日商簿記検定2級を受験できるよう、工業簿記の学習を進めている。3年はほぼ10年にわたって継続されたケイ酸による水稻多収技術のケイ酸作用機序についてほぼ解明できた。来年度以降、新たな課題の発掘から取り組む必要がある。
		C 食品科学	食品の成分分析ならびに食品加工技術を学ぶとともに、地域の農産物を生かした加工品の開発などを目指し、食品関連産業に貢献できる人材を育成する。	2年生は、食品化学、食品製造、微生物の基礎を習得する中でレポート作成を行い、まとめる力を身につけた。3年生では学んだ知識・技術を応用し、課題研究の授業で新たな加工品開発、食品成分分析など探究的に取り組み、発表することができた。文化祭では地域の方に加工品を販売することができた。進路については、食品関連産業へ就職する生徒もあり、今後も地域に貢献できる人材の育成に努めたい。
		D 環境科学	身近な環境についての各種調査・研究活動を意欲的に取り組むと同時に、その成果をもとに信州の環境の実態やこれからの農業についての自分たちの考えを様々な機会に発信し、地域の環境や農業を守る人材を育成する。	2年生は、環境科学、食品製造、食品化学を習得する中でトマトジュースの原材料である加工トマトを鶏糞などを用いて低コストで栽培する研究を行いレポートにまとめた。3年生では学んだ知識・技術を応用し、課題研究の授業で食品残渣や食品製造排水を微生物の力で分解し、廃棄されるカイロに含まれる鉄を植物栽培へ利用する研究に取り組んだ。また、農業技術検定では約8割の生徒が3級を取得した。進路については食品・環境だけでなく多方面へ就職・進学している。
		E アグリネットワーク	栽培基礎的な学習とその利用について考え、農業の楽しさ・食の大切さなどを地域に発信するための「農業」「園芸」を活かした交流活動を考えて実践する。活動を通して地域と社会に貢献する意識と、自らのコミュニケーション能力を向上させ、卒業後も多方面において活躍できる力を養う。	2年生は、栽培プロジェクト学習を通して他者と協力しながら栽培学習の基礎やレポートのまとめ方を学ぶことができた。3年生は、コロナウイルスの影響でこれまで自粛していた交流活動を再開・新たに実施することができた。JA親子ふれあい農業塾は4回開催することができ、農業の楽しさを地域の子供たちに教えると共にコミュニケーション能力の向上へと繋がった。遊休農地削減を目的とした、ワタを活用した地域活性化プロジェクトでは、地域の方々を対象としたミサンガづくり体験や、AC長野パルセイロを応援するミサンガを作成し秋には実際に選手に渡すことができた。今後は、地域にワタ栽培を広めていくことが課題である。
		F 園芸デザイン	草花の栽培管理の知識・技術を身につけるとともに、それを生かした交流・販売活動を実践する。地域連携を経験することでコミュニケーション能力を養成し、地域貢献できる人材を育成する。	これまで自粛してきた外部イベントでの販売や交流活動なども再開することができた。直接消費者の方と触れ合うため、改めてコミュニケーションの大切さや商品を買ってくれる人のことを考えた生産や活動が大切だと感じた。日常では、2年生が花壇苗を中心に花卉栽培の知識と技術の習得を目指して栽培に取り組んだ。3年生では冬の代表であるシクラメンを栽培しており、きれいに咲かせることができた。
		G 施設野菜	施設を中心とした野菜栽培に関する知識と技術を習得し、野菜の特性や栽培に適した環境を理解する。地域農業と生産現場の担い手となるスペシャリスト養成と、地域社会に主体的に貢献できる人材育成を目標とする。	野菜栽培の技術・知識の習得や、新しく導入した水耕栽培やココバック栽培の施設で情報通信技術（ICT）を活用したスマート農業を学習した。新システムのため、栽培管理方法が確立していなかったため生産性を高めることができなかった。地元の伝統野菜である小森ナスの栽培では、目標であった発信や普及を進めることができた。コロナ禍が続く中、地域との交流も図れた。
		H 果樹科学	果樹の栽培管理を通じて、知識・技術ならびに態度を身につけ、地域産業の担い手を育成するとともに、地域社会に主体的に貢献できる人材育成を目指す。	今年度もコロナ禍でのプロジェクト学習活動の中で、果樹栽培の基礎的な知識・技術の習得を目標に取り組んだ。2年生はモモを中心に栽培調査を行った。3年生の課題研究ではモモ・ブドウを中心に新たな省力化栽培方法ならびに高品質化栽培の調査・研究を継続した。また、今年度から校内わい化りんご樹の果実品質調査及び鳥害対策にも取り組んだ。地域農業への貢献を目指した地域密着型の活動再開が望まれる。同時に栽培規模を見直し、適正な管理ができるよう検討していく必要がある。